

ビワ生育情報

千葉県
平成29年7月号

最近1年間の気象及びビワの生育状況

平成28年7月から平成29年6月までの月別の気象は表1に示した。この1年間の平均気温は15.8℃で平年より0.2℃高かったが、平成28年9月、10月及び12月は平年より1℃以上高く、平成28年11月及び平成29年3月は平年より1℃以上低かったように寒暖差が激しい年であった。降水量は年合計が1,697mmで、平年の83%、前年の74%であった。日照時間は年合計が2,023時間で、平年の104%、前年の106%であった。

時期別の気象とビワの生育状況を振り返ると、平成28年の梅雨明けは7月29日頃で平年より8日遅く、梅雨明け後から夏の間は平年より並みかやや低く推移したため、花房の発現は平年よりやや早かった。収穫直後の日照時間はやや短かったが、花房の着生率は平年よりやや高かった。関東に接近した台風は6個あったが、産地への影響はほとんどなかった。冬の間は気温はやや高く、開花の進みはやや早かった。1月下旬に寒波があり、幼果が寒害を受ける最低気温-3.0℃以下の日が1日あったため、寒害は平年より多かった。果実の生育は、開花期以降の気温が平年並みに推移した影響で、平年並みに進み、収穫盛期は平年より1～2日遅く、前年より9～11日遅かった。

表1 平成28年7月～平成29年6月の気象（暖地園芸研究所）

年	月	気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
H28	7	24.0	24.4	24.5	114	194	297	182	175	208
	8	26.0	26.0	25.7	232	145	180	169	220	197
	9	24.0	22.7	22.0	239	251	449	104	145	129
	10	18.9	17.9	17.9	86	250	93	118	137	185
	11	11.9	13.2	14.2	186	148	237	122	145	125
	12	9.6	8.6	10.1	119	85	102	188	165	147
H29	1	6.1	6.0	6.6	66	90	58	206	170	141
	2	7.0	6.3	7.7	29	97	99	185	152	150
	3	8.1	9.2	9.8	148	186	165	173	157	149
	4	13.8	13.9	15.4	212	174	198	184	172	126
	5	18.5	17.8	18.6	115	174	142	229	177	218
	6	20.9	20.8	21.0	151	244	273	163	133	137
平均/計		15.8	15.6	16.2	1,697	2,038	2,293	2,023	1,948	1,912

平年：昭和56年～平成22年の平均

※：平年値の算出方法を平成29年4月号より気象庁と同様に変更したため、前年の同月号の平年値より大きく変動しているところがある。また、平成28年7月号～平成29年3月号の平年値も再計算したので既報と数字が異なっているところがある。

本年度産果実の特徴

1. 収穫期

収穫期は表2に示した。暖地園芸研究所における収穫始期、盛期及び終期はそれぞれ、「楠」が5月31日、6月5日、6月8日、「大房」が5月31日、6月8日、6月11日、「田中」が6月15日、6月17日、6月19日であった。収穫盛期は3品種共に平年より1～2日遅く、前年より9～11日遅かった。花房の発現はやや早く、開花の進みもやや早かった。開花期から収穫期までの気温は平年並みに推移したため、幼果の生育は順調に進んだ。

表2 収穫期（暖地園芸研究所）

品 種	収穫始期(月. 日)			収穫盛期(月. 日)			収穫終期(月. 日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	5.31	5.29	5.21	6.5	6.3	5.25	6.8	6.7	5.29
大 房	5.31	6.3	5.29	6.8	6.7	5.30	6.11	6.11	6.3
田 中	6.15	6.11	6.5	6.17	6.15	6.7	6.19	6.20	6.12

平年：昭和62年～平成28年の平均

2. 果実の大きさ及び収穫量

収穫果実の大きさと品質は表3に示した。果重は「楠」が44g、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ73g、75gであった。「楠」は平年より17%下回り、「大房」は平年より9%下回り、「田中」は平年より1%上回った。

横径は「楠」が4.2cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ5.1cm、5.0cmであり、「楠」及び「大房」は平年を下回り、「田中」は平年並みであった。縦径は「楠」が4.7cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ5.4cm、5.7cmであり、「楠」は平年を下回り、「大房」は平年並みで、「田中」は平年を上回った。

果形指数は「楠」が0.89、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.94、0.89であった。3品種共に縦長の果形であった。

本年の着花房率はやや高かったが、寒害を被った幼果が多かったため、最終的な着果量は3品種共に平年並みからやや少なかった。果樹カメムシ類の被害は少なかったものの、主力品種「大房」は小玉傾向であったため、産地全体の収量は平年よりやや少なかった。

3. 糖度及び酸度

糖度は「楠」が12.3、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ11.7、11.6で、「楠」は平年並みで、「大房」及び「田中」は平年より高かった。

酸度は「楠」が0.13、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.17、0.31で、「楠」は平年よりやや低く、「大房」及び「田中」は平年並みであった。

4. 食味

果肉硬度は「楠」が0.52、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.56、0.55で、3品種共に平年並みであった。

糖酸比は「楠」が95、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ71、39で、3品種共に平年より甘味を感じやすかったため、食味は良好であった。

5. 病害虫及び生理障害の発生

本年は、収穫期までの果樹カメムシ類の発生数は少なく、産地における被害も少なかった。クワゴマダラヒトリの食害は平年より少なかった。病害では、がんしゅ病の発生がややみられた。生理障害では、5月から収穫期直前まで日差しが強く、高温の影響で「大房」を中心に日焼け及び紫斑症の発生が多かった。

表3 果実の大きさ及び品質

品種	調査地	果重(g)		横径(cm)		縦径(cm)		果形指数		糖度(Brix)		酸度(g)		硬度(kg)		糖酸比	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
楠	暖地園研	44	53	4.2	4.5	4.7	4.8	0.89	0.95	12.3	12.3	0.13	0.15	0.52	0.52	95	81
	青木	67	79	5.0	5.3	5.2	5.4	0.95	0.98	11.9	10.5	0.14	0.15	0.55	0.57	84	70
大房	南無谷	79	78	5.2	5.2	5.5	5.4	0.94	0.97	11.5	10.5	0.16	0.17	0.56	0.56	73	62
	暖地園研	73	83	5.1	5.3	5.5	5.5	0.93	0.97	11.8	11.2	0.21	0.19	0.58	0.58	58	59
	平均	73	80	5.1	5.3	5.4	5.4	0.94	0.98	11.7	10.7	0.17	0.17	0.56	0.57	71	64
田中	青木	73	73	5.0	5.0	5.6	5.4	0.88	0.93	11.1	11.1	0.36	0.28	0.55	0.55	31	40
	南無谷	78	71	5.1	4.9	5.7	5.5	0.88	0.90	10.9	10.1	0.29	0.32	0.55	0.57	38	32
	暖地園研	73	79	5.0	5.1	5.6	5.6	0.89	0.92	12.9	11.3	0.27	0.29	0.55	0.56	49	39
	平均	75	74	5.0	5.0	5.7	5.5	0.89	0.91	11.6	10.9	0.31	0.30	0.55	0.56	39	37

果形指数：横径／縦径 糖度：屈折糖度計の測定値 酸度：果汁100ml中の酸含量をリンゴ酸(g)に換算した値
 硬度：果実硬度計による測定値 糖酸比：糖度／酸度
 平均：3地区の平均、平年：昭和62年～平成28年の平均(ただし硬度は平成12年～平成28年の平均)

8月～10月の作業

8月下旬から9月下旬までがせん定及び施肥の適期となる。花芽は9月中旬頃には確認できるようになり、10月に入ると発育が進み、花房の形を表し、10月上中旬には摘房・摘らいの作業が始まる。

せん定

8月下旬から9月中旬に行う。徒長枝や混んでいる枝を間引いて、樹冠内部に光が入るようにする。作業の効率化を図るため、二段盃状形の樹形を目指し、低樹高化に努める。

施肥

9月に基肥を施用して花房の伸長、充実を図る。耕土の浅い園では10a当たり成分量で窒素12kg、リン酸9kg、加里9kgを施用し、耕土の深い園ではそれぞれ11kg、9kg、7kgとやや少なめにする。

摘房・摘らい

摘房は発育不良の花房や混み合った花房を間引き、1樹の全枝の半数に花房を残す。摘らいは花房基部から3段目までの小花梗の中から充実した2段を残して他をかき取る。花房の長さが3～5cmの時に摘らいすることで、開花期間を延長させることができ、寒害の被害を受けにくくすることができる。

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合がある。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>